

## 体育教師教育における教科に関する指導力の育成についての考察 —受講生の主観的評価からみた体育模擬授業の成果—

小松崎敏<sup>1)</sup>

### General Survey of the Recent Japanese Educational / Teacher Educational Reform and Case Study of its Effectiveness on Physical Education Teaching Simulation based on Results of the Students' Subjective Evaluations

Satoshi KOMATSUZAKI

#### Abstract

In this study, the recent Japanese teacher educational reform is reviewed. The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) and Central Council for Education, which is a consultative body of MEXT, have been emphasizing the necessity for improving teacher quality. In order to foster trusted and high-quality teachers at the undergraduate level, teacher education curriculum in higher education has to be reconsidered continuously so as to correspond with national educational policy. The Central Council for Education proposed a minimum standard for novice teachers, 1) sense of professional and responsibility for education, 2) social and communication skill, 3) classroom management skill based on the understanding of students, and 4) ability of subject teaching.

In consideration of these teacher educational reforms, particularly fostering the ability of subject teaching in the teacher education curriculum, the methodology of microteaching or teaching simulation are highly effective. Physical Education classes are held not only in the classroom but also in the gymnasium, athletic field, swimming pool and so on, therefore some particular teaching skills are needed for PE teachers in consequence.

In the second semester of 2007/08, 10 PE teaching simulation classes which are an elective subject for second to fourth grade students were practiced at Biwako Seikei Sport College. Seventy-two college students answered the 12 item class assessment questionnaire at the end of semester. The number of positive answers regarding all 12 items are significantly higher than that of negative responses ( $p=.000$  by Fisher's Exact Test). PE teaching simulation classes are acceptable to students and are in great demand by students. Considering that the PE teaching simulation class is a compulsory subject for all students getting their PE teacher's certificate, the reexamination about students' satisfaction for the teaching simulation is indispensable. Furthermore, the objective investigation of learning outcomes by taking part in the teaching simulation class is necessary.

Key words : Physical Education Teacher Education, Teaching Simulation, Subjective Evaluation

---

1) 生涯スポーツ学科

## 1. 緒言

2006年、教育基本法が約60年ぶりに改正され、続く2007年には教育三法の改正と、我が国における教育施策は、今大きな転換期にさしかかっている。改訂学習指導要領の施行を目前に控え、また教員免許の更新制度についても実施に向けた取り組みがなされている(中央教育審議会, 2007)。

本稿においては、我が国の教員養成、教員免許制度改革の動向について概観するとともに、本学において現在教職課程外に配置され、教員免許取得のために直接的には必要とされない体育模擬授業の成果について、受講生による主観的評価を手がかりとして検討しながら、今後の体育教師教育と教職課程のあり方について展望する。

## 2. 我が国における教員養成制度改革

### 2.1. 開放制の原則と教職課程

改正教育基本法においては、「教員」にかかわる条文が第九条として独立し、その第2項では、「教員については、(中略)養成と研修の充実が図られなければならない」と明示されることとなった。教員免許更新制度はこの「研修」に呼応するものであり、もう一方の「養成」に関しては、教職大学院制度等の施策が対応することになる。

戦前における教員養成は、基本的に高等師範学校等の専門の学校で行われていた。しかし戦後、「大学における教員養成」と「開放制の教員養成」という2つの原則に基づいて、教員養成のための教育は大学で行われることとなり、これを契機として大学における教員養成のための課程、すなわち「教職課程」が置かれることとなった(中央教育審議会, 2006)。

### 2.2. 中教審が位置づける「教員として最小限必要な資質能力」

中央教育審議会(中教審)は、2006年7月

の「今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)」において、「大学における教職課程を、「教員として最小限必要な資質能力」を確実に身に付けさせるものに改革する」必要性を強調している。その背景のひとつとして、「希望すれば誰もが教員免許状を容易に取得できるという」開放制の原則に対する誤認識をあげ、教員免許状の保有者が、教員としての専門的力量を必ずしも備えているとは言い難い現実を指摘している(中央教育審議会, 2006, pp.7-11)。

ここで中教審が強調する「教員として最小限必要な資質能力」とは、教育職員養成審議会(教養審)第一次答申(1997)における「養成段階で修得すべき最小限必要な資質能力」を受けて定義されており、「今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)」中に明示されている。すなわち、

1. 使命感や責任感、教育的愛情等
2. 社会性や対人関係能力
3. 幼児児童生徒理解や学級経営等
4. 教科・保育内容等の指導力

の4点である。これらは、いわば「教員としてのミニマム」と捉えることができる。中教審は、大学の教職課程においてこれらのミニマムを確実に身に付けさせ、明示的に確認するために、「教職実践演習(仮称)」を新設し必修化することを提言している。

### 2.3. 「教職実践演習(仮称)」の新設・必修化の潮流

2008年3月の教育職員免許法施行規則の改正は、教員免許更新制に重点を置くものであり、教職実践演習の必修化は見送られる見通しとなった(全国私立大学教職課程研究連絡協議会教員免許事務検討委員会, 2008)。しかし、上越教育大学(2005)における「特色ある大学教育支援GP(特色GP)」や、岡山大学(2006)の「資質の高い教員養成推進プログラム(教員養成GP)」において、教職実践演習の取り組みが先行的になされているよ

うに、将来的に必修化されることは十分に予想できる。

教職実践演習とは、「学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、(中略)最終的に確認するもの」(中央教育審議会, 2006, pp.14-15)である。この主旨を踏まえ、演習の実施時期は、教職課程に関する全ての科目を履修し終えた「4年次の後期」が適当とされた。すなわち、教職実践演習は教職課程履修の最終的なチェックの機能を有するものであり、「この科目の履修を通じて、将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能を補い、その定着を図ることにより、教職生活をより円滑にスタートできるようになることが期待され」(中央教育審議会, 2006, p.15)ている。

以上のように、教職実践演習の性格が、教員としてのミニマムの「修得」に対して、直接的に大きく貢献しようとするものではないという点には、十分に留意する必要がある。つまり、教職課程認定大学においては、教職実践演習の履修以前に、教員としてのミニマムの修得させようようなカリキュラムを構成しておかなければならないということになる。もっとも、教育実習が教職課程のほとんどの科目を履修し終えた「集大成」として実施されている現状を踏まえれば、当然の考え方である。教育実習に行くからには、教員のタマゴとして、一通りの職務を著しい支障が生じることなく実践できるはず、ということである。

なお、中教審の答申においては、この教育実習の改善と充実についても言及されている(中央教育審議会, 2006, pp.16-18)。「課程認定大学は、教員を志す者としてふさわしい学生を、責任を持って実習校に送り出すことが必要」であり、教育実習の履修に際して「十分な成果が見られない学生については、最終的に教育実習に出さないという対応も必

要」という、きわめて強い意見が述べられている。また、「いわゆる母校実習については、できるだけ避ける方向で、見直しを行うことが適当」とも指摘されている。

#### 2.4. 教職課程科目と教員としてのミニマム、特に教科・保育内容の指導力

以上に見たように、我が国における教員養成、教員免許制度は、時代の変化にともない不断の見直しが行われているが、現行教職課程の単位履修制度は、おおむね、1997年の教養審第一次答申を受け、1998年に大幅に改正された教育職員免許法および施行規則を基本としている。ちなみに、小、中学校教員免許状取得のために必要な「介護等体験」も、この時期に導入されている。

表1には、2007年度現在における、中学校1種免許状(保健体育)および高等学校1種免許状(保健体育)を取得するための必要単位数を示した。1998年の大幅改正にあつては、「教科に関する科目」の最低履修単位が従来の半数にまで削減(40→20単位)され、その分を充足するために、中学校1種免許状で8単位、高等学校1種免許状で16単位という「教科又は教職の科目(いわゆる又は科目)」が新設された。

さらに「教職に関する科目」を拡充し、特に「各教科の指導法(いわゆる教科教育法)」が重視されることとなった。「教科指導は生徒指導等と並び学校教育の根幹をなすもの」であり、「各教科の授業やそのための教材研究などを中心に、その一層の充実を図る」という観点から、従来「実質的に2単位程度平均」であった各教科の指導法の単位数が、中1種で8単位程度、高1種で4単位程度にまで引き上げられた(教育職員養成審議会, 1997)。

このような教科の指導法を重視する方針は、教員としてのミニマムにまで継承されることとなった。教科に関する科目や他の教職に関する科目との連携をはかりながら、教科

に関する指導力を修得させるための授業内容の検討が求められている。中教審答申(2006, pp.60-65)では、別添資料として、最終学年で実施する教職実践演習において、教科に関する指導力が修得されているかを確認するための到達目標を例示している。

1. 教科書の内容を理解しているなど、学習指導の基本的事項(教科等の知識や技能など)を身に付けている。
2. 板書、話し方、表情など授業を行う上での基本的な表現力を身に付けている。
3. 子どもの反応や学習の定着状況に応じて、授業計画や学習形態等を工夫することができる。

なお、これらは「基本的・共通的な指標」とされ、課程認定大学の裁量によって別の目標を加えることが許容されている。

表1 中学校1種および高等学校1種(ともに保健体育)の教員免許状取得に必要なとされる単位

		中学校1種		高等学校1種	
教科に関する科目	体育実技	4	20	4	20
	「体育原理、体育心理学、体育経営管理学、体育社会学」及び運動学(運動方法学を含む。)	6		6	
	生理学(運動生理学を含む。)	2		2	
	衛生学及び公衆衛生学	2		2	
	学校保健(小児保健、精神保健、学校安全及び救急処置を含む。)	6		6	
教職に関する科目	教職の意義等に関する科目	2	31	2	23
	教育の基礎理論に関する科目	6		6	
	教育課程及び指導法に関する科目	12		6	
	生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目	4		4	
	総合演習	2		2	
	教育実習	5		3	
教科又は教職に関する科目	教科又は教職に関する科目	8	8	16	16
教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目	日本国憲法	2	8	2	8
	体育	2		2	
	外国語コミュニケーション	2		2	
	情報機器の操作	2		2	
合計		67		67	

### 3. 保健体育科の教員として必要な指導力の育成

さて、本学においては「開放制の原則」のもと、中学校教諭1種免許状(保健体育)および高等学校教諭1種免許状(保健体育)取得のための教職課程認定を受け、保健体育科の教員養成を実施している。制度的に言えば、表1に示した67単位を取得することによって、教員免許状が取得可能となっているが、これまで見てきたような教員養成制度改革の動向を踏まえ、また、学校教育現場や社会的な要請を視野に入れながら、教職課程の内容について検討し続ける必要がある。

とりわけ、体育授業が教室で行われる座学の授業とは異なり、体育館やグラウンドという比較的広範囲において、運動の指導をともない実践されることを踏まえると、中教審が例示する基本的・共通的な教科に関する指導力にくわえて、体育授業実践に関するより専門的な指導力が必要とされることは、容易に理解できる。この点を考慮すれば、教科の指導法に関する科目は、より専門的、実践的な立場から、確かな指導力の修得に貢献する構成としなければならない。

たとえば、筑波大学(長谷川・岡出, 2003)や愛媛大学(日野, 2003)などにおける体育教師教育では、受講生を教師役と生徒役に分け、実際の体育授業を想定した模擬授業を実施している。いずれの実践事例においても、模擬授業が教職課程内の指導法に関する科目として配置されており、教員免許取得者に対して模擬授業の受講を要求している取り組みである。

### 4. 本学における体育模擬授業実践

#### 4.1. 模擬授業の概要

開学以降、本学で開講してきた体育模擬授業は、学校スポーツの理論と実際(以下、理論と実際とする)学校スポーツ専門実習ⅠおよびⅡの3科目である。うち、学校スポーツ

専門実習の2科目は、学校スポーツコースにおける専門科目であることから、受講はコース生約40名に限定されている。したがって、学校スポーツコース以外に所属する学生で、体育模擬授業を受講しようとする場合は、実質的に「理論と実際」を履修するほかない。

理論と実際は、2年次生を対象とする生涯スポーツ学科共通科目として、後期に開講しているが、学科をまたいだ競技スポーツ学科生や3年次生が受講することも少なくない。特筆すべきは、教員免許の取得のために必要とされない、教職課程外の科目という点である。すなわち、この科目の受講は教員免許の取得希望にかかわらず任意であり、模擬授業の経験を目的とする学生が多いと考えられる。2007年度後期における履修者の内訳は、表2の通りである。

表2 2007年度理論と実際の受講者数

単位：名	生涯スポーツ 学科	競技スポーツ 学科	合計
4年次生	0	1	1
3年次生	5	8	13
2年次生	58	9	67
合計	63	18	81

理論と実際では、体育授業の計画、実践、振り返りという一連の流れを、模擬授業形式で経験させる。同時に、体育授業に関する組織的観察法を適用し、体育授業を観察記録させる。この科目の履修によって身に付けること、すなわち到達目標は、次の点に集約される。

- 1) インストラクションおよびマネジメント技術を活用しながら、体育授業を展開することができる。
- 2) 期間記録法、相互作用行動観察法、学習従事観察法を活用しながら、体育授業を観察記録することができる。
- 3) 観察記録を活用しながら、体育授業を振り返ることができる。

履修者の多くが2年次生であり、初めての

模擬授業経験であることから、深い教材研究に基づくすぐれた実践よりも、むしろ30人程度の学習者をコントロールしながら、50分の授業を一通り展開するということを要求している。筆者は、担当グループが実施した模擬授業を踏まえて、授業をよりよくするための視点について、助言、解説するようにしている。

履修者は10のグループに分けられる。1週に2つのグループが模擬授業の担当となり、グループ内の3名が教師役、残りのメンバーはVTR撮影と組織的観察法に基づく授業記録を実施する。模擬授業は合計10回実施するため、1つのグループが授業担当となるのは2回である。つまり、教師役を経験できるのはグループの中の6名であり、模擬授業において教師役を経験できない履修者が、わずかではあるが発生してしまう。現在、すべての履修者が教師役を経験できるよう、代案を検討中である。

#### 4.2. 模擬授業に対する履修者の主観的評価

図1に、2007年度後期において実施した授業評価の結果を示した。この授業評価は全学的に実施したものであり、完全無記名、成績には一切関係ないという条件のもと、授業担当教員不在の状況で実施した。有効回答は72であったが、Q12にのみ1件の記入漏れがあった。単位認定者ベースの有効回答率は、88.9% (Q12は87.7%) である。

回答は4件法に基づいていることから、肯定的回答と否定的回答に分断し、直接確率計算(両側検定)を実施した。その結果、すべての質問項目において、肯定的な回答数が否定回答を有意に上回っていた ( $p=0.000$ )。

さらに詳細に検討するため、非常に○○であった、とても△△だったなど、きわめて肯定的な回答のみを抽出し、それ以外の回答数との比較を試みた(図2)。その結果、Q2授業の内容に興味をもてましたか ( $p=.003$ )、Q5教員の説明はわかりやすかったですか

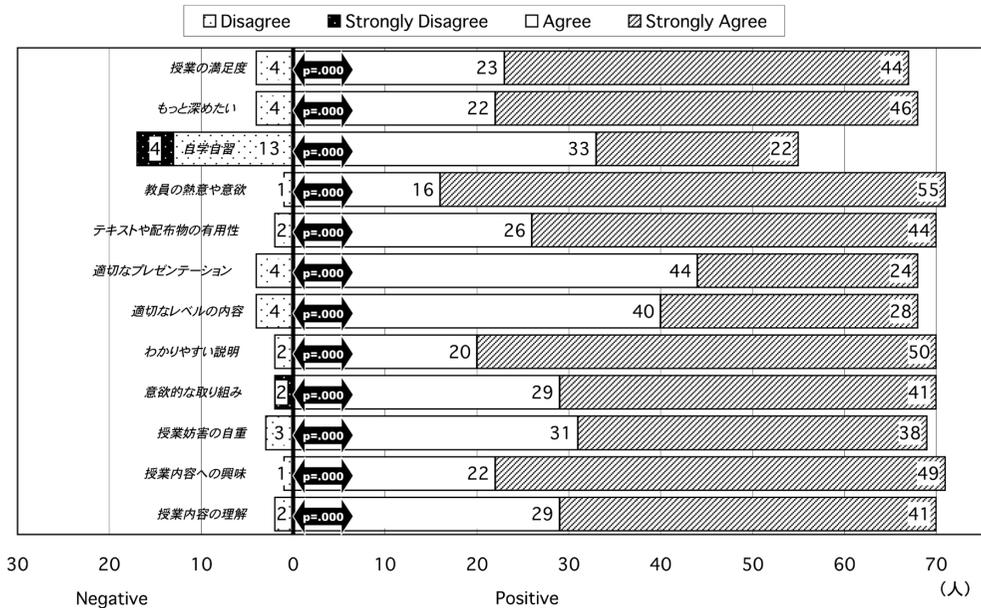


図1 2007年度理論と実際の授業評価（肯定的回答と否定的回答で分断）

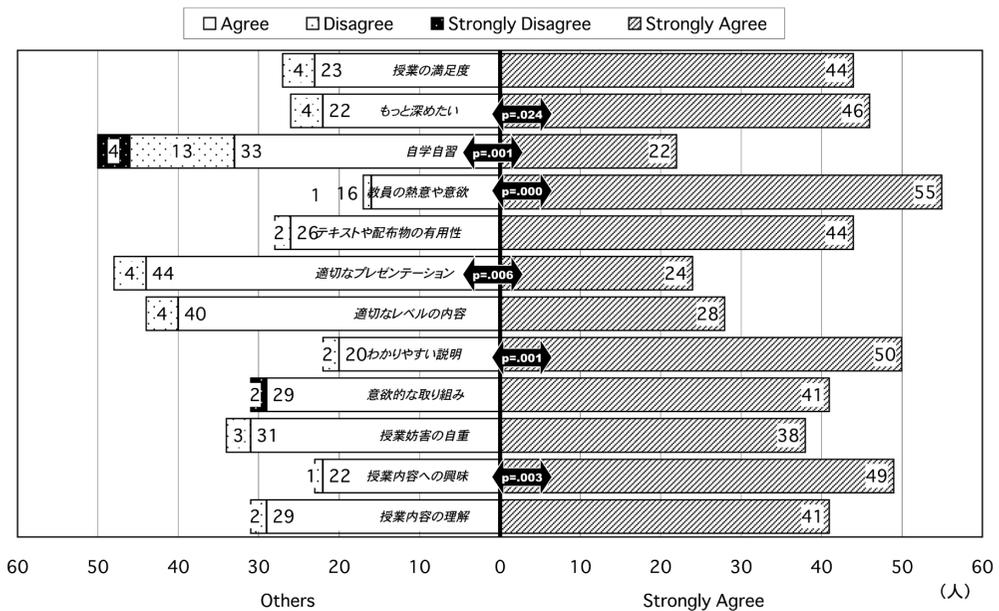


図2 2007年度理論と実際の授業評価（きわめて肯定的回答とそれ以外の回答で分断）

( $p=.001$ ), Q9 教員の授業に対する熱意や意欲が感じられましたか ( $p=.000$ ), Q11この授業で学んだことをもっと深めたいと思いますか ( $p=.024$ ), という4つの質問において、きわめて肯定的な回答が、それ以外の回答よりも有意に多かった。その一方で、Q7プレゼンテーションの仕方は適切でしたか ( $p=.006$ ), Q10自学自習をどの程度しましたか ( $p=.001$ ), という2つの項目では、きわめて肯定的な回答は有意に少なく、次年度以降の検討課題として導かれた。

以上の結果から、2年次向けとして開講している模擬授業は、履修者に受容され肯定的に評価されたと判断する。とりわけ、Q2の「とても興味もてた」という回答が有意に多いことから、学生が模擬授業に対して寄せる期待と関心をうかがうことができる。また、Q11の「もっと深めたいと、とても思う」という回答も有意に多く、模擬授業に対する潜在的な需要は高いと推察できる。

しかし、この結果はあくまで履修者の主観的評価であることから、模擬授業の目標に履修者が到達したのか客観的に提示する必要がある。また、先述の通り、この模擬授業は教職課程外にある任意選択の科目であり、当初から意欲が高い学生が受講している可能性が十分にある。仮に教職課程において模擬授業を実施した場合においても、このような評価を得ることができるのか、検討しなければならない。

## 5. 体育教師教育における模擬授業と教職課程

たとえばオーストラリアのクイーンズランド大学では、3年次に20日間、4年次に60日間の教育実習を科している(長谷川・高橋, 2005)。それに対して、我が国の教育実習は、中1種で15~20日間程度と諸外国に比べて短期間である。教育実習は学校教育現場を体験できる貴重な時間であるのに、インストラクションやマネジメントなどTeaching Skill

(シーデントップ, 1983)のごく基本的な事項がおぼつかないようでは、せっかくの実習機会を有意義に活用することはできない。30人の前に立ちインストラクションをするということを、教育実習に赴いて初めて経験するという事態は、自動車の運転経験がないにもかかわらず、見よう見まねで一般公道を走り始めたということに類似している。このような状況では、教員免許取得時に最小限必要な資質能力を保証できるとは言い難い。

教職課程科目として体育模擬授業を実施する場合、多くの課題がある。

本学における4年間の模擬授業実践を振り返ると、1つの模擬授業に参加する受講者数は、30~34名の生徒役と6~8名の授業実施、観察班の合計40名程度が妥当ではないかと考える。受講生が増えた場合に、どのように対応するのか、検討しなければならない。

また、体育授業の組織的観察法を多用する本学模擬授業のようなスタイルであると、受講生に対して観察法を講義し、実際の運用にあたってサポートを行うなど、手厚い配慮が必要となる。授業結果を受講生にフィードバックするためのサマリーシート(小松崎, 2007)についても、模擬授業実施の度にデータを集計し、作成、配布、解説しなければならないなど、模擬授業の実施には、きわめて多くの労力がともなう。授業の質を下げることなく、模擬授業を実施するためには、人的資源の拡充が有効な方法の1つと考える。

大学院生をティーチングアシスタント(TA)として活用する事例は、多くの他大学で認められるものの、本学は大学院組織をもたないことからこの方法は不可能である。数年前より、3年次生を2年次向け理論と実際に、4年次生を3年次向け学校スポーツ専門実習に、それぞれボランティアサポーターとして導入している。あくまで主観的印象に過ぎないが、このサポーター制度の効果は確実にあると考える。しかしながら、サポーターは全くのボランティアであり、他の講義時

間と重なっていたり、実習期間等と重なる場合も多いことから、常時的継続的に配置することは難しい。

この点については、たとえば、発展的な学習内容を構成して、異学年の学生が同一時間に同一場所で受講するといった、積み上げ式のカリキュラム構成などが有効な方策となりうる。

教育のアカウントビリティが厳しく問われている今日、現場の教師には反省的な授業実践と日々の授業改善が望まれている。それと同様に、教師教育の側である教職課程についても、その成果の検討と絶えざる見直しが求められる。中教審が指摘するように（中央教育審議会，2006，pp.20-21）、将来的には教職課程にかかわる事後評価や認定審査の厳格化が見込まれる。しかし、それに対して対処療法的に取り組むのではなく、教員養成カリキュラム委員会（教育職員養成審議会，1997；中央教育審議会，2006）等が中心となって、本学において育成すべき保健体育教師像を明確にし、主体的継続的に取り組んでいくことが重要である。

## 文 献

- 中央教育審議会（2006）新しい時代の義務教育を創造する（答申）．[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05102601/all.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05102601/all.pdf)．
- 中央教育審議会（2007）今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）．[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/06071910.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/06071910.htm)．
- 長谷川悦示・岡出美則（2003）筑波大学の体育

授業実習例．高橋健夫編著 体育授業を観察評価する．明和出版：東京，pp.145-151．

- 長谷川悦示・高橋健夫（2005）オーストラリア・クイーンズランド大学における保健体育科教師教育プログラム．筑波大学体育科学系紀要，28：199-209．
- 日野克博（2003）愛媛大学での模擬授業の実践．高橋健夫編著 体育授業を観察評価する．明和出版：東京，pp.152-155．
- 上越教育大学（2005）教職キャリア教育による実践的指導力の育成—分離方式の初等教育実習を中核として—．<http://www.juen.ac.jp/gp/tokushoku/>．
- 小松崎敏（2007）体育授業における「サマリーシート」の作成と模擬授業での活用事例．日本体育学会第58回大会予稿集，326．
- 教育職員養成審議会（1997）新たな時代に向けた教員養成の改善方策について（第一次答申）．[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/12/yousei/toushin/970703.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/yousei/toushin/970703.htm)．
- 岡山大学（2006）大学コンソーシアムによる幼稚園教員の養成—地域社会に密着した子育て支援と幼保一元化への対応—．<http://ed-www.ed.okayama-u.ac.jp/~yougp/index.html>．
- シーデントップ，Q.：高橋健夫他訳（1988）体育の教授技術．大修館書店：東京．（Siedentop，D.（1983）Developing Teaching Skills in Physical Education second edition. Mayfield Publishing Company: Mountain View.）
- 全国私立大学教職課程研究連絡協議会教員免許事務検討委員会（2008）教職実践演習に関する情報．[http://blog.livedoor.jp/zenshi\\_menkyo/archives/720193.html](http://blog.livedoor.jp/zenshi_menkyo/archives/720193.html)．
- （URLは2008年3月1日現在）